HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	〔論文紹介〕『ドイツにおける労働者教育と国家の関係』
Author(s)	中囿, 桐代
Citation	社会教育研究, 12, 91-99
Issue Date	1992-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28491
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_P91-99.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

〔論文紹介〕『ドイツにおける労働者教育と国家の関係』

中 囿 桐 代

今回紹介する論文はFranz Pöggerの『STUDIES IN PEDAGPGY, ANDRAGOGY, AND GERONTOLOGY vol. 4 The State and Adult Education』に収録されているPaul Röhrigによる『ドイツにおける労働者教育と国家の関係』("THE RELATION BETWEEN WORKERS' EDUCATION AND STATE IN GERMANY")である。

ドイツの労働組合は現在でも公的な労働者教育に大きな影響力を持っていることは広く知られているが，労働組合運動はその起源から教育を重視してきた。今回紹介する論文では，ドイツで労働組合組織の設立が始まる19世紀の初頭から第2次世界大戦前を6つの時期に区分し，それぞれの時期にそれぞれの労働組合がどのような教育活動を行い，その際，国家とどのような関連をもっていたのかという視点で分析を試みている。第2次世界大戦前(1870年～1930年)には党派に指導された労働組合運動が組織されおり，それは以下の3つの組織に代表される。①「ドイツ労働者組合同盟」を代表とする左派系労働組合，②キリスト教労働組合，③自由主義的志向の労働組合，である。この論文ではそれぞれの組合がいかにして誕生し，どのような教育を行い，国家とどのような関係をもっていたのかという問題を取り扱っている。もちろん，教育の内容等については充分には触れられていないので，若干物足りなさを感じる点もあるが，前に述べたような点において非常に興味深いものである。以下，論文の紹介に移ることにする。

1．ドイツ労働者の非合法の協会

ドイツの労働者の労働と教育の運動の起源からすでに，二重の国家との関係が運動の発展の特徴であった。それは，一方では状態を悪化させ，一方では発展を押し進める。非合法のドイツの熟練工の協会(association)はドイツ国家の中ではこのような組合(union)を禁止した時代に，ドイツの労働者の運動の起源と見なされるはずである。普通，社会的な問題に関係のある政治的な組織は，法律によって禁じられていた。そして1835年1月15日，ドイツ政府はパリとスイスでのドイツの熟練工と労働者の協会の設立に対して，以下の法令をもって反対した。

「ドイツの職人は，我が国と他国において社会の平和を妨げる可能性があるいかなる協会や会合に加わらないことがドイツ同盟の利益であるので，ドイツの職人がそのような協会や会合が黙認されている国や場所に旅行することを禁じる」(Birker, Karl: Diedeutscen Arbeiterbildungsverein 1840－1870. Berlin 1973, p. 18)

加えて，これ以上，そのような協会と会合を黙認できないようなスイスに対するドイツの圧力は運動のリーダーの排除を引き起こした。彼らはそれにもかかわらず，パリで新しい共同体を設立し，後にはロンドンとブリュッセルでも設立を行った。

非合法の協会と国家政府との関係はもちろん，後者の許可を与えない行動によって決定されるが，その（基本的に民主的でない）見取図によっても決定される。最初の協会はギセッヘ・マチーニの秘密結社「ヤング・ヨーロッパ」や「ヤング・ジャーマニィ」」から刺激を受けた。それらはイタリア，ドイツ，ポーランドで国民国家と民主組織そ求めて苦闘するのに献身的であった。

ビィルヘルム・バァイトリングが「正義の人々の同盟」から強い知的な影響を受けたとき，パリから始まり外国の他のドイツの協会に広まった社会的改革のプロパガンダの波は，成功して「ヤング・ジャーマニィ」の民主的イデオロギーと競争しはじめた。この改革運動は一般的には共産主義とよばれ，マルクスの共産党宣言の中で触れた有名な「まぼろし」となった。バァイトリングのキリスト教的共産主義の福音は，国家と財産の観念を結び，国家には財産保護の責任を負うことを要求し，結果として財産を持たない者は誰でも祖国を持たないことを結論づけた。バァイトリングはさらに記している。「我々の財産をうばうことのできる，非合法の，外部の敵はない。なぜなら，すでに地方，内部の敵に奪われてしまっているからである」(Weitling, Wilhelm : Garatien der Harmonie und Freiheit. Berlin 1955, p. 85)

非合法のドイツの労働者と熟練工の協会が祖国に，招かれた国にも，その広がりを縮小することを期待せざるを得なかったような抑圧は，しばしば彼らに秘密同盟を組織させた。特に初期には多くの協会は二重のイメージを持っていた。つまり，外見上は読書，歌声，教育的なグループ，あるいは社会的相互扶助を現し，内実はメンバーの数人は陰謀組織の第一人者に従って厳しく組織されていた。しかしながら，同時により多くの相互扶助，社交，教育を助成することを目的とした協会は「ヤングジャーマニィ」「正義の人々の同盟」と直接的には関係のないことを表明した。

すべての協会は，読書，講義，討議という手段によって，一般的な初期の教育か，それともより進んだ専門的な教育か，あるいは政治教育か，いずれにせよ教育を強調したのである。しかし，たぶん一番重要なことは最初に組織された労働者が民主主義の基礎である組織とコミュニケーションの形式をまったく始めから訓練したことである。例えば，規則の制定と遵守，委員の選挙とローテーション，要求や陳情書にかんする討議と投票……

結果的には，よく自らを労働者教育協会と呼ぶ初期のドイツの労働者の協会とドイツ連邦との関係は，過激な反対ではなく，互いの批判によって性格付けられる。国家は社会的平和が妨げられるのを恐れ，民主的で社会的な革新を恐れた。他方ではコミュニケーションの形式と教育的な活動による，ドイツの将来の民主的社会的な発展にとっての基礎が横たわっていた。

2．労働者友愛会

1848，49年という革新的な時代の間，協会に属する権利と集会を行う権利が交付された。そして，すでにあったドイツの労働者の協会に政治的理念を公的な眼識にするように指導し，新しい社会の基礎を強化し，そして，有能な印刷工ステファン・ボーンが組合を同盟，「労働者友愛会」へ一体化させた。

「労働者友愛会」は，新しいタイプの国家を求めて苦闘し，この目的をもった革命勢力であった。そして，国家によって保証されるべき消費者の――生産者の協同組合と労働者の利益配分――革新を要求した革命勢力であった。ヒルデガード・ライジヒは労働者が主に物質的な面での向上に興味をもっているわけではないことをことを説得力をもって示した。つまり，むしろ彼らの人間の概念は，とりわけ，人間の尊厳，労働者の尊厳を強調したドイツの観念主義とフランスの啓蒙思想の理念によって大いに導かれた。従って，教師たちの他には，労働者と同様に強く教育の再編を要求する他のグループはなかったことはなんら疑問はなかった。国家は必要ならどこででも自由な教育と，『能力に応じた』若者のための自由な教育を与えるべきであった。見習いと訓練をうける人のための夕方のクラスを区別し，成人教育は以下のような条件で要求された。「労働者協会と公的な図書館は，一般的に労働者の一層の教育への関連をもった科学的な教育に寄与するだろう。科学的教育とは別に，国家は工業教育を支援し，技術学校を設立し，現在ある公的な技能短大を拡張すべきである。」(Balser, Frolinde: Sozialdemokrate 1848/49. 2 Bde. Stuttgar 2/1965, Source No. 50)

国家はすぐに労働者の圧力をもった理念的な高揚に答えた。そしてついに1854年労働者協会を禁止した。ただ，全く政治的な活動を避けた，『Kolpingverein』のようなものは生き残ることが出来た。

3．60年代の自由主義の協会

ドイツにいわゆる新しい時代という政治的な生命が現れ始める1859年に，国民単位の運動と自由主義勢力は新たな立場を得た。「国民協会」と，2年後「進歩党」が設立された。新しい生命は，ほんのわずかに残っていた労働者協会を刺激し，たくさんの新しい組織が設立された。最初，ちょっと見たところ，労働者友愛会や外国の教育的な協会とは連続性がないようにみえた。協会の多くはすでに設立され，労働者の政治的な目的を促進しなかった自由主義者によって指導された。かつてバァイトリングがしたように。そして，このように，協会は「労働者友愛会」が労働者のために申し立てたほどには，公的で強い意見を発達させることはできなかった。新しい協会はむしろ合理的で自然な社会的組織――人類の進歩を保証することのできる唯一の組織――を保証することので

きる，やがてくる経済，自由主主義に恩恵を与えた。しかしながら，貧困化した労働者階級のの出現と増大が進歩という概念と調和されることは無理であった。一部の自由主義者はいわゆる「社会的な問題」に関係するようになった。もし，自由主義経済構造が合理的で進歩的な縮図なら，労働者の貧困化のようなネガティブな現象を説明することのできる理由が2つだけあった。つまり，一方では市民的な理性にふさわしい知識とふるまいの欠けている労働者自身のせいであると非難する。もう一方では，不完全に発達した自由主義と工業化のせいにする。これらの申立ては2つのタスクを負う。労働者は一般的な進歩的な発達を共にするのに充分な知識を与えられるべきであること。しかし，労働者は彼ら自身の経済的，政治的目的をもって，自由主義的な進歩をさまたげることがないようにすべきであった。ラッセルの下の「ドイツ労働者一般協会」が1963年から意図したように。

労働者の教育は，1863年に日刊ドイツ労働者協会を発行したことであり，後にスポークスマンは念入りの討議について述べた。「我々は労働者の知識を増すことが労働者階級の状態を向上させるために主要な手段の一つであることを発表した。そして，我々は労働者協会が知識，経営，経済的なことの知識を拡大する必要を，そして，モラルと市民的性質を強め，錬成する必要を言語と文字を使ってメンバーと友人に指し示すよう要求する」(Berchte über Verandlungen der Arbeiterverein 1863−1869. Hg. D. Dowe, Berlin/Bonn 1971 , p. 9)

すでに1861年に偉大な自由主義者，ハーマン　シュルツ―デリッシュが以下のように述べている。労働者にとっての進歩の決定的なポイントはマニュアルから知的な仕事への変革である。知的な仕事は労働者を論理的に考えることに導き，肉体労働を自然力にまかせながら，もっとも劣悪な肉体的な労働から労働者を自由にする。「唯一この方法が労働者の真の解放のための希望を与える。果てし無い奴隷状態や権威主義の力からの解放――これは随分前から達成されていた――ではなく，労働者に密着した欠乏から，制限から，最も気高い力の浪費からの解放である。」(Feidel−Mertr, Heldegard (Hg.): Zur Geschichte der Arbeiterbildung. Bad Heilburnn 1968, p. 16 ff)

最後の引用は我々の主題に関係のある本質的な議論を紹介する。果てしない苦痛と奴隷状態からの解放は随分前から勝ち取られていた。ただ，労働者の密着した欠乏，無学と専門性の制限は，まだ，最も大切な力の発達を妨げていた。労働者の真の解放はこのように事柄を彼ら自身の手に入れることに，またむしろお金を節約し，彼ら自身を教育することに期待された。つまり，技術的，経済的発展は休息を確立するだろう。労働者の寄付は政治的な自制や，せいぜい進歩派の観念的な支援，最初は彼らに否定されたメンバーシップであろう。年1回のドイツ労働者協会の会合はこのように何度も政治に携わること対する警告によって特色づけられる。支配的な介在と禁止によってだけではなく，労働者の政治的な巻き込みは，独立的に発達する自由主義的発展の時代には不必要であると考えられたからでもある。

4．第1次大戦前の社会民主主義とフリー・ユニオン

次の一連の議論は，最初のむしろ潜在的な，協会の会合のレポートの中で，労働者のための政治的教育の必要性への言及，政治的状況への不満，組織自身の政治的概念の助言へつながっているはずである。オーギュスト　ベーベルの影響の下にあった，1868年の会合の時に，最終的にはバランスは他の側に傾いた。協会の大部分はロンドンの国際労働者協会のプログラムを指示し，翌年アイゼンナッハで社会民主党を設立した。それはとりわけビィルヘルム　リープクネヒトの影響を受けており，それはマルクスとエンゲルスの理論に基づいた党になった。協会はこのように初期の労働運動の政治的目的に逆戻りして新しい方向をみつけた。

W. リープクネヒトの有名なスピーチ「知は力なり，力は知なり」，それは1872年にドレスデンの教育的な協会に先駆けて独自に述べられ，その時から何度も何度も再版され，引用されてきたものであるが，それと同様に社会民主党の教育的政治的目標がどこにもないことを明らかに宣言した。リープクネヒトは労働者の教育を通じて自由を求めて努力すべきだという自由主義的な勧告を「自由を通じて教育へ」というモットーに変えた。支配階級は教育を通じて彼らを解放するという主題を決して認めてはいなかった。むしろ，支配階級は力を出すために知識を使ってた。リープクネヒトにとって現存する国のシステムはブルジョアの力を保証する階級システムであり，そして彼は学校と教育システムをこれらに不平等のきわめて明らかな証拠として，階級システムを永続させるきわめて不平等な教育的な機会として受け止めた。リープクネヒトは何人かの自由主義者によって共有された見解には同意しない。それは国家には夜警という役割を与えられるべきであり，教育や経済は自由な力に任せておくという見解である。リープクネヒトにとってこれはより進んだ平等と正義を作るには不十分な方法である。人々を真の教育から分離する壁を壊す，彼の社会民主主義的見解は，唯一自由な人々の国家の創造こそ，彼らに知識の根源を解放するはずである。

「国家の最も高い職務は国家を通じて唯一可能となる。つまり，もし国家がこの職務を果たすことが不可能であることを証明するなら，国が現存する権利はない」(Liebknecht, Wilhelm : Wessen ist Macht－Macht ist Wessen und andere bildungspolitisch－pädagogiche Äuβerrungen. Berlin. 1968, p 30)

リープクネヒトはスピーチを自由国家，すべての反対と不調和を乗り越えた自由社会像を描くことでしめくくった。しかし，政治的声明だけがこの目的に達することができた。ただ階級システムを乗り越えることのあとにだけ，文化的国家が発展できたからである。

「我々は国家と社会をこえてゆかねばならない。もし我々が努力，政治的努力をあきらめたら，我々は教育と知識をあきらることになるだろう……。ただ自由な人々の国家だけにおいて人々は教育に達することができる。唯一人々が政治的な力を求めて努力すれば，知識の門は彼らにひらかれるだ

ろう」(前掲, Liebknecht 1968, p 94)

続く10年間，社会民主主義の教育的な事業は政治的な努力によって完全に決定された。つまり，これは労働者にかれらの社会的状況と彼らの歴史的な職務を認めることを可能にし，そして階級社会を「自由な人々の国家」にすることを変えることにすべてのエネルギーを集中させるように彼らを援助することを意味した。

フリー・トレード・ユニオンは当初のベルリンの党の学校と同様に社会民主主義的労働者教育の学校へメンバーを送った。そして地方のレベルでもでも協会連合は長い間党と共に働いた。しかし，すぐに組合の職員は党の学校は多すぎる理論と少なすぎる実践的知識を教えることに不満を述べた。必然的に，1906年以降，フリー・ユニオンは教育的協会の設立を始めた。その組合学校の中心はベルリンにあった。しかしながら，地方のレベルでは多くの組合連合が党と協同関係にあった。

党と組合の異なった目的，それは共通の基礎を軽蔑したが，それらの目的は国家との異なった関係を含んでいた結果，教育事象への関係によって労働者の分裂を進めた。社会民主党がまだ革命や国全体としての進歩的な変化を目的としている間に，組合は労働環境の確かな改善のための努力していた。たとえ労働者のストや暴動が政治的なシステムを時々脅かしても，そして労働者が5月1日に8時間労働を擁護してデモを行った時に労働者が公的な権威を感じたとしても。組合は自らを政治的にというよりは社会的に敵の力と対決させるようであった。彼らの組織的な仕事のために沢山の教育を受けた，組合の学校とは別に，社会民主主義において政治的に教育された職員が必要であった。

多少の違いはあったとしても，両方の組織は国家に対してむしろ緊張関係を持っていた。しかしながら，1914年に驚くべきことに「祖国」にとって疑いをいれない感情が現れ，自由な人々の国家を建設する企てが多くのチャンスをもたらした1918年までの数年間で強い意見が抑えられた。

5．カトリック・ドイツとプロテスタントのための民族協会

1890年11月，新たに設立されるカトリック・ドイツ人のための協会に加わるようカソリック・ドイツ人へのアピールは以下の分で始まる。

「重大な誤りと問題のある破壊的な計画がどこででも明らかになる。つまり，現存する国家と社会的秩序はその基礎を脅かされている。これらの誤った信仰を広げ，実践的な生活へ彼らを導くよう要求するのは，なかでも特に社会民主主義である」(Heitzer, Horstwalter: Der Volksverein für das katholische Ddeutschland im kaiserrich 1890−1918. Mainz 1979. p. 305)

ビスマルクとカソリック教会の間の文化的な闘いが終結し，社会主義者にたいする法律が取り消されたあと，カソリック教会は現存する国家と社会秩序のための献身をしいて明らかにしたようである。そして我々は同じアピールの中でこのような文を読むことが出来る。

「もし，ドイツ皇帝がドイツ女王と共に，理念支持して警察力と戦うことを要求した政治の方向をそのままにするなら，人々のキリスト教の精神は，教会と国家の両方を脅かす不正な理念を支持して戦うために今でも充分に強いのだという信用において顕在化するだろう。ドイツ人のカソリック信者，我々はこの信用を裏切る最後の人になるのだ！」

「国民協会」と国家の関係は1つの方向の中で明らかであった。国家は社会民主主義という破壊的な試みに対して守られねばならず，そしてその結果，まず真先に，誰もが労働者の目的に反対しなければならなかった。しかし，同時に誰もが人々の真の権利，特に労働者の権利を求めて闘わねばならず，このように「民族組織」も国家に対して要求をした。社会民主主義とともに「民族組織」は普通選挙制を擁護し，そのために悪戦苦闘し，階級にもとづくプロシアの選挙制度に対して闘った。大きな影響力をもつ教会界が，社会民主主義が強化されないようプロシアでの選挙制の改正を防ごうたしたことは，「民族組織」にとっては「不可能なこと」であり，司教団との激しい対立をもたらした。

一方，1890年の組織の最初の目的は社会民主主義という破壊的な計画に対して闘うことであったが，何年かたつうちに強調点のゆるやかな移動があった。キリスト教の社会的な教義に従った社会改革の支援は1906年に改定された法令の表現によく見られる。その第一節は以下のとおりである。

「組織の目的は社会においてキリスト教を増進することである。特にドイツ人に対して新たな社会事業を説明することを通じて，そして，すべての職業の社会的経済的地位の実際に改善することを彼らに教えることを通じて。同時に組織は社会の宗教的基礎に対する全ての攻撃を退けることを要求し，社会的な領域の誤った信仰と破壊的な活動と闘うことを要求する。」(Heitzer, Horstwalter : Der volksverein für das katholiche Deutscheland im Keiserrieich 1890−1918, Mainz p. 301)

同じ年（1890年）の全ての労働者組織を統一する協定を作るためにプロテスタントのキリスト教信者に対して出されたアピールは以下のように始まる。

「今年の10月1日社会主義者に対する法は取り消された。民主主義への道は開かれた。この党は今やはっきりと頭角を現し，すでに祖国の指導者になろうとしている……。我々は貴方たちドイツ・プロテスタントに問う。すべての方針にそって加わった勢力とともに，社会民主主義を支持して闘うことができるようこの協定に加入せよ」(Frank. Lic. (Hg.): Gescheichte der dem Gesamtverbande Evangelisher Arveitverein Deutschland angeschiossen Provinzial−und Landensverbande, o 0. 1915, p. 6 ff)

伝統の結果として，そして皇帝との特別な関係のためにドイツのプロテスタントはカソリックよりも多分に徹底的に政府に対して誠実であった。その一方で，彼らはカソリックのものと比較する社会的な教義を持っておらず，そしてそれに従って，彼らが国家の社会的視点を問うことができるような教義をもっていなかった。ますます多くの解放された労働者にもかかわらず，プロテスタントの労働者組織は彼らをほとんど不自然な状態にあるとみなした。彼らは独自の社会的教義も独自

の政党（社会主義者，カソリック，自由民主党とともに並べるつもりはないが）を持っていなかったので，彼らは労働者に保守党に投票するよう，政府に非常に忠実であるようアドバイスした。このような二重の傾向は当然プロテスタントの労働者組織に成功を与えることはなかった。

6．ワマール共和国の時代

プロテスタントの労働者組織は徐々に自らをよりつよい社会の政治的契約に委ね，組合の活動は複雑になった。このようにワイマール共和国は主に労働者の教育を支援するのと同じ力によって支えられたといえるかもしれない。つまり，社会民主主義，組合，中央政党，人民組織（国民協会），そしてプロテスタントの社会的集団によって。ワイマール憲法の148条は以下のとおりである。「成人教育のセンターを含む教育的な組織をドイツ国家，地域，共同体は支援すべきである」。そして，このように労働者の教育の支援を弁護した。組合は，1920年にはすでにスト続けることによる反乱を防がねばならなかった。組合は経済民主主義と社会的発展を求めた。つまり，社会民主主義者は民主的な方法をもった資本主義に打ち勝つこと，すくなくとも緩和することは可能だと信じた。カソリックとプロテスタントの社会主義の政治家は，今や彼らが「状況の改革」を達成することができることを望み，また，すべての者は別の国家を求めはしなかった。

これらの組織における労働者の教育は積極的に社会的な目的によって決定された。つまり，それは社会的な組織において，そして政治的な意味で職務と役割をひきうける訓練をすることを意味した。民主的な意識と社会的存在の民主的形式の練習を強めることも意味した。社会民主主義に対する闘いと異なった組織が協力した一般的な闘いはノーマルな政治的な論争とみなされなければならない。というのは，同時に教育の分野において，自治を行い，協力するための主要な職務を持っている人々の全ての隙間に橋をかけるであろう社会構成体の理念があらわれたからである。国民協会から組合や社会民主主義者まで，成人教育運動の新たな方向に対して，特に「労働共同体」の理念と形態へ全ての人は共感を感じた。たとえ中立的な態度を取れなくても。共産主義者と国家主義者は異なった理由のためにワイマール共和国と闘った。依然として両者は一部の労働者の味方であった。共和国の視点からすると，両者は国家に反対する一つの方法で労働者を教育することに従事した。そして，それはもはや「労働者教育」とは呼べない。というのは我々のいう「教育」とは自己教育と公平な批判を含んでいるからである。

このような理由から，ヒトラーの強制的な労働者組織において与えられた訓練は我々のテーマとは関係がない。

第2次世界大戦後，労働者教育はより使用者ための教育や一般的な成人教育になった。しかしながら，労働者教育の概念を再生する試みが――たとえば「模範的な教育の概念」はオスカー・ネヒトによって発展させられた――繰り返され，この点では，もはや労働者教育が存在しないというこ

とは正しくない。階級意識へと導く教育という今も原理的には存在している意味においてと同じように，より広い意味での労働者教育が明らかに民主主義国家との関係において，ポジティブに評価される。特別の組合，キリスト教同盟の一種，個人的な組合の「忠誠心」，成人教育センターに頼っている「左派」と「右派」の傾向は，個人の組合や成人教育センターや，ネガティブな方法で民主主義国家への影響をもっているグループの連合に補助を与えることを国家に決定させなかった。そして，もし経験的な研究が多くの異なった発見に帰着するなら，それは疑わしい。その上でこの面が終わりにならず，歴史にならないことが主張されるだろうし，そして，それはこのように歴史研究から除外されるかもしれない。